













私は「原爆文学」を超歴史的ジャンルとしてではなく、戦後日本の言説空間を構成した問題領域プロブレマティクのひとつと把握したい。それは「原爆文学」を容易く手放すこととは別である。「原爆文学」が領域化されるプロセスにおいて人々が真摯に語った戦後のヴィジョンを丹念に再構成しながら、なおかつ、出来事としての記憶を掘り起こすことで、現在の論者自身をも拘束する知と感性を問い返すような記述が必要だと考えている。本稿はそうした試みの序論である。

(第六節)

「原爆文学」が領域化されるプロセスにおいて人々が真摯に

語った戦後のヴィジョンを丹念に再構成しながら、なおかつ、現在の論者自身をも拘束する知と感性を問い返すような記述」がどのようにしたら可能なのか、皆さんとの話し合いの中で、さらに模索していきたいと考えています。

※ちなみに発表後半で話した内容は、「原爆文学研究」の可能性―九・

一、日本国憲法、ポストコロナール」と題して『*problématique* III 文学／教育3』(二〇〇二年七月)に掲載しています。是非あわせてご覧ください。